

庄野潤三の戦争文学『逸見小学校』論

——チエーホフ『三人姉妹』との関連性を手がかりに——

村手元樹

一、はじめに——『逸見小学校』の発見と意義

庄野潤三の『逸見へみ小学校』は、平成二三（二〇一一）年、庄野の死後、書斎から発見された遺稿である。『新潮』平成二三年八月号で発表され、すぐさま新潮社から単行本化された。原稿の末尾の記載によると、脱稿は昭和二四（一九四九）年一月二二日。実に六十年以上の歳月を経て、世に出たことになる。

この発見はさまざまな点で意義深い。第一に銃後の戦争体験に触れる作品は少なくないが、自らの軍隊生活自体を題材にした作品はほとんどなかった庄野の手によって自身の軍隊経験を踏まえ、軍人を主人公に据えた本格的な「戦争文学」が書かれていたことである。但し『逸見小学校』脱稿以前の昭和二二年の習作期に同じ「千野ちの少尉」（庄野自身がモデルと思われる）が登場する短編「青葉の笛」を地方誌に発表しているが、これについては後述する。第二に短編の夫婦小説「愛撫」（『新文学』、昭和24・4）で小説家として世に出る直前にこのようなストーリー性のある中編小説が書かれていたこと。庄野は「愛撫」におけるデビュー以後、昭和二九年の「プールサイド小景」（『群像』、昭和29・12）に至るまで、戦後の、夫婦二人だけのアンニュイな日常生活の一コマを淡々と描く短編の「夫婦小説」を次々に発表した。この時期の庄野の文学遍歴はそう大まかに整理されていただけに、『逸見小学校』の登場は半ば

意外な感が否めなかった。

しかし同時に第三の点として『逸見小学校』は夫婦小説へとつながる面も備えていることが覗える。本稿では特にこの点に注目したい。以前、拙稿^①で考察したように昭和二十年代は庄野が試行錯誤しながら自らの小説の在り方を探究した「修業時代」とも呼ぶべき時期であり、その探求は昭和二十二年に自ら行った、実作のための「チェーホフ研究」と深く関わっている。『逸見小学校』をこの流れの中に置いてみると、異色の作品という概観とは別に、同時期の他作品と共通する面も見えてくる。すなわちチェーホフの世界観、技法を自分なりに受容し、またチェーホフの作品から直接的にモチーフや表現を取り入れている。『逸見小学校』に関しては、とりわけチェーホフ四大劇の三番目の作品『三人姉妹』^②(一九〇〇)との関連性が深い。

そこで本稿では『三人姉妹』を中心にチェーホフ受容の面から『逸見小学校』を考察する。このことは『逸見小学校』の特質を明らかにすると同時に、以前考察した昭和二十年代における庄野の文学修業のあり方を再認識し、補強する作業ともなるだろう。次にそれを踏まえながらも『逸見小学校』独自のあり方、特に庄野にとつての戦争体験及び戦争文学とは何かについて考えていきたい。

二、「わが文学の課題」と『逸見小学校』

まず『逸見小学校』の梗概を確認しよう。一九四五年三月末の午後、海軍少尉の千野が、横須賀駅に降り立つところから始まる。彼は独立高角砲隊の隊長として昨日まで館山海軍砲術学校にいた。各地の砲台へと向かう準備期間として横須賀警備隊に一時籍を置き、他の高角砲部隊とともに逸見国民学校に約一ヶ月間駐屯することになったのである。千野は昨晚、他の将校と酒を酌み交わし、泥酔して、翌朝隊員たちが先に国民学校に到着し、遅れてのこのこ現れるという失態を演じてしまう。そんなふうに始まった、逸見国民学校での一ヶ月間の生活を描くのがこの小説であ

る。「出撃までの約一ヶ月の間に出来るだけ兵隊をのんびりさせてやつて、充分に英気を養ひ、心身ともに力を充溢させる」というのがここでの方針であった。訓練をしながらも、ドッチボールなどをしたり、墓参り休暇の名目で帰省したりなど、比較的余裕のある日々を過ごす。千野はこの機会に妹の女学校時代の友だちで、結婚相手の候補者として妹に薦められていた、江原みちこ（みち）⁽³⁾を東京に訪ねる。みちことの淡いロマンスが『逸見小学校』の一つの柱となっている。もう一つの柱は、同僚の将校たちや部下たちの人柄がうかがえるエピソードや千野との温かな心の交流がユーモアを交えて描かれることである。『逸見小学校』は、みちこが疎開した那須で彼女と再会する場面で終わっている。那須の自然描写は美しく、詩情豊かである。

『逸見小学校』に書かれている千野少尉の経歴は庄野自身の経歴と概ね重なっており、それを大枠として虚実を交えて創作されたものと考えられる。

鷺只雄は庄野の自筆原稿を見て、推敲の段階で削除されているものの、逸見小学校での一カ月に關して「海軍生活の中で初めてのある幸福な期間」と記した部分があるのを指摘し、「この作品のテーマをいちはやく知らせるものとして見逃せないであろう。別の言い方をすれば〈逸見小での一カ月はオアシス〉であったということである。」と述べている。⁽⁴⁾

確かに「オアシス」とも言えるのだが、この作品には、明るく、穏やかな旋律の中にしばしば破滅の予感が顔を覗かせ、常に背後に控えているような暗いトーンがあることも見落としてはいけない。『逸見小学校』が描く、昭和二年三月から四月にかけての時期は、日本軍が敗色濃厚で、東京大空襲によって首都は壊滅的状况に陥り、沖繩戦が始まり、本土決戦によって最期の時を迎えるのを待っていた。このような絶望的な時代状況が作品のところどころに垣間見える。校庭の桜が満開の日、千野がひとり桜を眺めながら物思いにふける場面がある。

桜の花を見てゐた千野は、今かうして桜を見てゐる自分と云ふものが、来年の今時分にはもう地上から影も形もなくなくなつてゐる、と考えた。すると、自分が死んでしまつたあとのこの世界に、季節が来てまた桜の花が咲い

て、それを自分以外の他の人間が眺めるであらうと云ふことには、全く興味が起らなかつた。そして、そんな気持で見る千野の目には、今年の桜は何だかひどくもの哀れに映つた。日本といふ国に終末が来たやうに、桜も今年がをはりのやうな感が濃くなるのであつた。或はこの列島の上で最後の決戦が行はれた後に、不意に或る瞬間、大陥没が起つて、ことごとく海中に沈んでしまふことになるのかも知れなかつた。^⑤

やがて自分の存在しなくなる世界に思いを馳せ、それでも変わらぬ巡ってくる季節を想像し、そこから振り返つて「いま」を見ることで、いま生きていることへの思いがより切実なものとなつていく。この場面は次のことと考え合わせると、特に意義深い場面である。

庄野は『逸見小学校』を脱稿した昭和二四年一月二二日からほぼ半年後の、昭和二四年七月二五日の『夕刊新大阪』文芸欄に「わが文学の課題」というエッセイを寄せている。昭和二四年四月「愛撫」^⑥を発表し、文壇デビューを果たしたばかりの庄野にとつて、まさに所信表明と言つたところである。そこには小説家として庄野が目指した「課題」がこう示されている。

しかし、と僕は時々思う。こんな風に僕は生きていくけれど、これから先、幾回夏を迎えるよろこびを味わうことが出来るのだろうか？僕が死んでしまつたあと、やはり夏がめぐつて来るけれどもその時強烈な太陽の光の照らす世界には僕というものはや存在しない。誰かが南京はぜの木の下に立つて葉を透かして見ている。誰かが入道雲に見とれて佇ちつくしている。そして誰かがひやあ！といつて水を浴びているだろう。しかし、僕はもう地球上のどこにもいない。

僕が夏の頂点であるこの時期を一番愛していたということは、僕をよく知る幾人かの人が覚えていてくれるだろう。だが彼等も亦死んでしまつた時には、もう誰も知らないだろう。それを思うと、僕は少し切なくなる。

そして、そのような切なさ、僕は自分の文学によつて表現したいと考える。そういう切なさが作品の底を音立てて流れているので読み終つたあとの読者の胸に（生きていくことは、やつぱり懐しいことだな！）という感

動を与える——そのような小説を、僕は書きたい。(傍線引用者、以下同じ)

ここにも『逸見小学校』の桜の場面同様に、自分の存在しなくなった世界に巡ってくる季節を想像し、そこから「いま」を俯瞰することによって、いま生きていることへの切ない思いが述べられている。そしてその「切なさ」を小説で表現すること、それによっていま「生きていること」が「懐しい」と読者に感じさせることこそが庄野の「文学の課題」であると言うのだ。

桜の場面はこの南京はぜの場面に比べ、やや虚無的な感は否めないが、生きる切なさを表現していることには変わらない。この「切なさ」は第十章(最終章)の那須での場面にも描かれる。江原みちを待つ千野は久々に自然の素晴らしさを味わい、伸びやかな気分になり、思わず詩のような言葉が湧いてくる。みちと再会し、牧草地を歩き出すと千野は今こうして二人でまた会っていることの偶然と不思議さを思う。「たゞ不思議なめぐり合せによって、たつた一回だけ二人が出逢ひ、お互ひに親近さと懐しさを感じ、さうして多分二人とも生きてゐるうちに再び会ふことなくして終るだらう。」と昨日までは思っていたからである。

しかし、今現に、彼は何事もないかの如く、それが極めて当然なことのやうに、黄昏の野原をみちと肩を列べて、明るく話し合ひながら歩いて行つてゐる。それが、千野にはふと不思議な気持ちにさせた。そして不思議だと思ふその気持は、奇妙に彼の心を切なくさせるのであつた。

(俺はいつたい何をしてゐるのだらう)

さう云ふ錯乱に似た感情が、彼の胸の底を流れてゐるのを感じた。すると、何でもないことのやうに肩を列べていま江原みちと一緒にこゝにゐることが、不意に空恐ろしいことのやうな感じが彼の胸に風のやうに舞ひ込んで来た。それは、自分とそばにゐるみちの二人だけを残して世界が不意に四方へ遠ざかつて行つて、二人の足もとを風が吹き抜けて行くやうな心細さだつた。

大きな時間の流れから「いま」を改めて眺め直す視点が「いま」をより切なくさせる。「わが文学の課題」の南京

はぜの場面において「僕が死んでしまつたあと」からさらに「彼等（僕をよく知る幾人かの人）も亦死んでしまつた時」へと時間的な俯瞰の距離を広げると同様に、千野もさらにより遠い未来に想いを馳せる。

そしておれと江原みちとは、このまゝ二度と逢ふことはないだらう。俺はやがて米軍の上陸作戦が開始される時に戦死し、そして江原みちも亦いつか死ぬだらう……)

千野の心はそのやうな想ひに包まれて行きながら、しかし最早や先程の錯乱は再び起らなかつた。むしろ不思議な落着きが彼の胸の中にひろがつてゆくのを感じた。

俯瞰の距離と比例して切なさは増幅していく。と同時に千野は、いま生きていることを実感し、心を慰められている。

昭和二四年八月に大阪の同人雑誌『文学雑誌』に発表した「十月の葉」にも「切なさ」が描かれている。「十月の葉」は庄野と武波という入隊した友人との交流を下地にして書かれた小説で、のちに読売新聞に寄せた「私の戦争文学」と題するエッセイ⁽⁸⁾の中でも庄野は取り上げている。武波を駐屯地まで訪ねて面会したときに交わした話として「私」のこんな体験談が出て来る。ある晩、「私」が街のピヤホールで飲んで帰る郊外電車の中でふと見かけた話である。二十歳ぐらいの酔つ払つた若い水兵が、十八歳ぐらいの美しい女性の車掌にしきりに話しかけるが、少女の方は窓の外を見て答えない。それでもふと微笑みを浮かべる瞬間もある。この光景に多少の心残りを感しながら「私」が電車を降りかけた時である。

支柱につかまつて身体を斜めにしたまゝの姿勢で、その水兵が云つた。

「あゝ切ない」

私は思はず笑ひ出した。外に立つてゐた車掌の耳にも彼の声が聞えたのだらう。彼女も私と同時にふき出してゐた。

(ひよつとしたら)と菜の花畑の間の夜道を辿りながら私は考へた。(あの二人は、恋仲だったのかも知れない。

水兵がひどく酔つてゐるので、少女の方が怒つた振りをしてゐたのではないか知ら

その晩の若い水兵も、やがて間もなく、大きな戦争の中へ、まるで笹舟のやうに押し出されて、そして何処とも知れず流されてゆくのであらう。それを思ふと、僕も切なかつた、と私は武波に告げたのである。⁹⁾

翌々日、武波から「私」のもとへ葉書が来て、簡単な報告の後こう締めくくつてある。

君は学校が毎日忙しいだらうね。今日は大変よい天気だ。呵、瀬津奈伊！

万葉仮名めいた表記で、(あゝ、切ない！)と洒落て、「私」の話と呼応させている。甘酸っぱい恋の切なさだけではない。やがて来る「大きな戦争」という時代状況から見返されることによつて切なさがより胸に迫ってくる。昭和二四年に示された「わが文学の課題」は、同年に書かれた庄野の戦争文学である『逸見小学校』や「十月の葉」においても確かに取り組まれていることが分かる。さらに言えば、いま生きていることの切なさ・懐かしさを表現するところが『逸見小学校』の重要なモチーフの一つであると言えるだろう。

三、チエーホフ『三人姉妹』と『逸見小学校』(一)

ところで「わが文学の課題」の夏の光景が、チエーホフ四大戯曲の三作目である『三人姉妹』のラストシーンの世界観に通じていることは、以前、拙論においてすでに考察した。昭和二年の夏に庄野はチエーホフから小説の技法や思想を学ぶためにチエーホフ研究を行うが、『三人姉妹』はその際に読んだと庄野が名前を挙げている作品の一つである。¹⁰⁾ そのラストシーンとは、姉妹ともども不如意な人生を送る長女オリガが、二人の妹を抱きしめ、再出発を期する場面である。

時がたつと、わたし達も永久に去つてしまつて、人はわたし達を忘れてしまふでせう。わたし達の顔も声も、わたし達が幾人ゐたかといふことも、すっかり忘れてしまふでせう。けれど、わたし達の苦しみは、やがてわた

し達のあとに生きる人達の喜びと変るでせう、幸福と平和がこの地上にくるでせう。そして彼等は、今生きてゐる人達のことを追想して、祝福するでせう。あゝ、可愛い妹達、わたし達の生活はまだ終つてしまつたのぢやないわ。生きて行きませう、生きて行きませう！ 音楽はあんなに楽しさうに、あんなに飲ばしさうに鳴つてゐる。そして、もう暫くすれば、わたし達にも、わたし達がなせ生きてゐるのか、なんのために苦しんでゐるのか、それがわかるやうな気がするわ……あゝ、それがわかつたらねえ、わかつたらねえ！¹¹

「わたし達」が去つた後の世界から「わたし達の生活」を俯瞰し、「苦しみ」としか見えない現在に新たな光が当てられてゐる。一見すると、これは死と対比させて生を捉えることによつて、一回性の生の尊さ、かけがえのなさを感じるという、単純な図式でとらえがちだが、この次の箇所を考え合わせるとそうでもないことが分かる。オリガの台詞の後、老軍医チエプトウイキンが「なんだつて同じことだ！ 同じことだ！」といつもの虚無的な口癖を独りごちる。何がどうであろうと大差ない、所詮人生は幻のようなものだといふのである。オリガはそれに構わず「あゝ、それがわかつたらねえ、わかつたらねえ！」と再度繰り返して幕が閉じる。ここに二つの重要な思想が対置されている。死からの眼差しは、生を貴重なものと思わせる半面、チエプトウイキンの思想のごとく人生はどうせすべて消え去るといふ虚無をも引き起こす。人生は死に帰結するという一元的な考え方がペシミズムを招き寄せる。チエーホフはこのやうなペシミズムと戦つた作家であつたが、しばしばペシミストと誤解された。小説「ともしび」のラストの有名な言葉であり、チエーホフの思想の根幹でもある「この世のことは何ひとつわかりやしない！」も小説を少し丁寧な読めば、決して絶望の言葉ではなく、この世を分かつたふうに一元的に理解しようとする虚無主義と対決する言葉であることが分かる。

チエーホフが言いたいの「わたし達」といふ個の終わりそのものが「いま」をかけがえのないものと感じさせるということではない。彼の視点は個の死がエンド（終わりあるいは端）なのではない。「わたし達」といふ個を遙かに越えた時間のスパンから「いま」を見返すことで「いま」に違つた意味が付加される。どんな意味かは分からない

が、むしろ分らないからこそ「いま」が様々な可能性を秘め、豊饒な色合いを帯びたものと感じられるのだ。その「いま」は一回性の孤絶したのではなく、時間を越えて様々なものと呼応する「いま」である。

『逸見小学校』の桜の場面も、同年に書かれた「わが文学の課題」の南京はぜの場面と同様に『三人姉妹』のラストシーンを念頭に置いたものと考えられる。自分の存在しなくなる時間にもまで視点を広げ、そこから「いま」を俯瞰することで、「いま」への思いがより複雑で切実なものとなる。そのチェーホフ特有の視点を庄野は既に感受し、実作に取り入れていることが分かる。

昭和二十年代、庄野は「夫婦小説」を通してチェーホフを受容しながら自分の小説のスタイルを模索していくが、その大きな成果の一つが「視点の深まり」であった。「わが文学の課題」で提示された「俯瞰する視点」は夫婦小説において徐々に獲得されていった。「愛撫」（昭和24）の妻の二元的視点から始まり、「舞踏」「スラヴの子守唄」（昭和25）では夫婦双方の内面に入り込む二元的視点を試すと同時に家庭を上から俯瞰するような視点を加えた。「舞踏」「スラヴの子守唄」の改稿（昭和28）では、家庭を上から俯瞰しながらも、語り手を神のような存在ではなく、先を見通すことのできない、あいまいな語り手に変更することで、人知の及ばない、分からないからこそ様々な可能性を含み込む、豊かな視点へと進展させた。「プールサイド小景」（昭和29）ではあいまいな語り手のほかに、さらに電車の乗客、水泳のコーチといった夫婦を客観的に眺める第三者的視点を登場させ、錯綜させながら、家庭における事件を俯瞰的にポリフォニックに眺めるといった、チェーホフ独自の喜劇的な世界にまで深めていった。一見、些末な日常がただ素材のまま投げ出されているかに見える庄野の作品だが、大げさに言えば、「いま」に厚みを与え、一切な「なさ」を増幅させる「時間的・空間的俯瞰装置」とでも言うべきものが、素材の複雑で微妙な味わいを極限まで引き出しているのである。それによって読者は、自らの何気ない日常の断片にも生の懐かしさを感じさせられる。これが昭和二十年代の庄野の一応の到達点であった。

このような流れの中に『逸見小学校』を置いてみると、『三人姉妹』の世界観を取り入れ、昭和二十年代に「夫婦

小説」を中心として目指した文学的課題が、異なるジャンルの実作の中でも不完全ながら既に試みられていたことが覗える。もちろんこうした手法や思想は、桜の場面だけでなく、先述したように『逸見小学校』のラスト、那須の高原の場面などにも反映されている。

さて以上『三人姉妹』のラストシーンに象徴されるチェーホフの世界観とそこから抽出されたエッセンスが「わが文学の課題」『逸見小学校』に受容されていることを見てきたが『三人姉妹』は『逸見小学校』の内容面での着想にも大きく寄与したと考えられる。そこで次に『三人姉妹』の中身に立ち入って考察したい。

四、チェーホフ『三人姉妹』と戦争のモチーフ

『三人姉妹』の梗概を確認しよう。四大劇の他作品同様、『三人姉妹』も一つの家庭が舞台となった家庭劇である。砲兵旅団が駐留する地方都市にプロゾロフ家はあった。父親が將軍だった関係でモスクワからこの片田舎に移り住み、父親の死後もこの家は軍人たちが集うサロンようになっていた。子供たちはモスクワに帰って新生活を始めることをそれぞれに夢想するが、夢破れていく。長男アンドレイはモスクワで大学教授になることを目指すが挫折、やっとこの街の市会議員となったもののカード賭博に嵌まり、借金の形に家を抵当に入れてしまう。長女オリガは女学校の教師として仕事に追われ、恋や結婚とは無縁の生活を送っている。次女マーシャは中学校教師と結婚するが、心満たされず、モスクワから赴任してきた、妻子持ちのウエルシーニン中佐に恋心を抱く。末娘のイリーナは働くことに生きがいを見出そうとするが、ままならず、自分を愛してくれるトゥーゼンバッハ中尉と婚約する。しかし第四幕で連隊のポーランドへの大移動に伴い、ウエルシーニンも去り、マーシャの密かな恋は終わりを告げる。またトゥーゼンバッハは同じくイリーナに思いを寄せる軍人ソリョーヌイとの決闘で死に、イリーナの結婚は幻となる。モスクワでの新生活の夢もこの田舎町での生活もままならず、失意の中、三姉妹が抱き合って再出発を期するラスト

シーンになる。

三姉妹に焦点を当てれば家族劇に違いないが、劇作家の宮沢章夫が『三人姉妹』を「戦争の劇」として読んでいるのは興味深い。管見の限りではそこまではつきり「戦争劇」と捉える論は少なく、宮沢が読みの可能性を求めた深読みであると思われる面があることも否めない。しかし、そう読ませる要素をいくつも含むこともまた事実である。チエーホフの意図はさておき、庄野が『逸見小学校』を書くにあたって『三人姉妹』から戦争のモチーフを感じ取り、創作のヒントにしたことは十分に考えられる。ではそれは、どのような点か。

まず舞台設定が軍人の家庭であり、軍人たちが集まるサロンでもあるという点である。『三人姉妹』を書き終えたチエーホフは、ゴリキー宛ての手紙に『三人姉妹』を書くのは、恐ろしく辛かった。三人の女主人公がそれぞれ典型であり、三人が三人とも——將軍の娘なのですから！ 舞台は、ペルミのような地方都市、環境は、——軍人たち、砲兵。」と書いている。⁽¹³⁾

次に時間的設定である。第四幕で連隊がポーランドへ遠征するまでの休息の時間を描くという意味では『逸見小学校』に似ている。宮沢の論では、時間が、戯曲が書かれた五十年ほど前の一八五〇年前後の「戦争の時間」に設定されているとするが、少し無理がある。ただ具体的な年代の特定はさておき、戦争前夜の時代の雰囲気を読み取ることが可能である。

三点目として、これが一番重要だが、長男アンドレイの妻ナターシャの暴力性である。ナターシャについては、ロシア文学者の池田健太郎も「幕を追うごとに横暴で専制的な主婦に変貌して行き、第四幕では家をのつとつて三人姉妹を追い出さんばかりになっている。」とその変貌ぶりに注目している。⁽¹⁴⁾ ナターシャは第一幕では周囲に恋仲であることを冷やかされ、恥ずかしがる初々しい恋人として登場する。第二幕では既に結婚し、息子も生まれ、この家の主婦として存在感を増大させている。息子のいる部屋が寒いと言って、日当たりの良いイリーナの部屋を要求するほどである。第三幕ではナターシャに娘も生まれている。既にイリーナの部屋はナターシャの子に奪われ、イリーナはオ

リガの部屋に同居している。またナターシャは姉妹の年老いた乳母に辛く当り、なぜこんな役立たずを家に置くのかとオリガに愚痴る。第四幕ではオリガは女学校の官舎に泊まり込むようになり、乳母もそこで暮らしている。ナターシャは侵略者さながらの勢いである。夫のアンドレイでさえ、第四幕では「あれは、ちつぽけな、盲目な、何かかう毛むくぢやらな動物を思はせる何物かを持つてゐます。とにかくあれは人間ではありません。」と妻を形容する。宮沢もナターシャを「『戦争への時間』を表徴する者」と捉える。

四点目は第三幕の町の火事の場合である。この家には直接の被害はないが、真つ赤に染まる窓が見え、半鐘が鳴る。人々が慌てふためく様子や、軍人が火事場で活躍する様子がせりふを通して間接的に描かれ、戦火による混乱を連想させる。ナターシャの暴君ぶりも火事場の緊張感の中で際立つ。

五点目は、池田健太郎も指摘するようにせりふの中にしか登場しないプロトポーフという男の不気味な存在感である。アンドレイの上司の市会議長で、ナターシャと不倫関係にある。「俗悪のかたまりのような男」であり、不在の人間でありながら、登場人物を牛耳っていると池田が分析するように、姿の見えない、迫りくる恐怖の隠喩とも取れる。

以上、表立って戦争をテーマにしているわけではないものの、戯曲の読者が戦争の属性を感覚的に読み取ったとしても何ら不思議ではない。

五、チエーホフ『三人姉妹』と『逸見小学校』(2)

さて、庄野は『逸見小学校』の構想を練る際、特にこれらのどこに触発されただろうか。おそらく抗うことの出来ない暴力性に対してそれに虐げられながらもその中で光を見出し、「いま」を生きようとする姿、その弱さと強さ。怒りと悲しみ。希望と諦念。庄野はそのポリフォニックな「いま」を感受したのではないか。

ナターシャは『三人姉妹』と同年にチエーホフが書いた小説「谷間」の登場人物、アクシーニヤにそっくりだ。アクシーニヤは商家の次男の嫁でこの家を牛耳っている。後から家にやって来た長男の嫁リーパに出来た赤ん坊に財産が分与される件に怒り、赤ん坊を殺してしまう。善良なリーパは病院から我が子の亡骸を抱え、帰る道で一人の老人に会い、荷馬車に乗せてもらう。その人を見るだけで何故だか心が静まったリーパは思わず聖職者ではないかと思う。罪もない子がどうして苦しむのかりーパは訊ねる。すると老人は「さあね、誰にもわからないんだよ！」¹⁶「なぜとか、どうしてとかいうことはね、全部知ってはいけないんだよ。」人間も何もかも知るようにはできていないんだよ、半分か四分の一だけ知ればいいのさ。生きていくために知る必要のあることだけ知ればいいんだよ。」この言葉は『三人姉妹』のラストにおけるオリガの言葉の意味を図らずも解き明かしている。すべてが分かった状態でも何もわからない状態でも虚無を招き寄せる。そのはざままで一步一步何が分かっていくのが人生だとチエーホフは言うのだ。老人は続ける。「お前さんの悲しみぐらいなんでもないさ。人間の一生は長いんだ、——まだまだいいこともある。悪いこともある、いろんなことがあるんだよ。母なるロシアはでつけえからなあ！」過酷な運命に対して人生の長さ、ロシアの大きさから俯瞰し、眺め直すことで「いま」に一元化できない色合いが生じ、癒やされる。「谷間」は『三人姉妹』のそういった構図を再確認させてくれる。

『逸見小学校』もまた敗戦濃厚となり、暗い未来が待ち受ける中、何とか「いま」に光を当てて生きようとする人々の姿を描いている。主人公の千野は絶望的な最終決戦を脳裏に浮かべながらも江原みちとの現在に胸をときめかせている。ラストの高原の場面は圧巻である。この場面が時間的に俯瞰されているのは先述の通りである。と同時に実は空間的にも俯瞰され、さらに「いま」に独特の色合いを与えている。千野は唐突にみちにロシアに関する新聞記事の話をする。ドイツが降伏したとき、モスクワの街中の鐘がすべて一緒に鳴り始め、人々は終戦を告げる鐘だと知って、家の外に飛び出し、抱き合っ、声を上げて泣いたというニュースである。「……僕はその記事を読んだ時、自分まで急に胸が熱くなつて来て、こみ上げて来た。ロシア人だけぢやない。世界中の人間がみんな大戦の苦し

みを耐へて来たんだ。大戦の深い深い悲しみを耐へてゐるんだなと思ふと、たまらなくなつた」と言い、(俺はいつたい何を云はうとしてゐるんだ)と錯乱するが、無意識の中で国を越えた世界の人々と戦争の苦しみ・悲しみが共有され、千野の思いが俯瞰されているのだ。そして絶望の中に一筋の光を感じさせる。

ちなみに空間的に「いま」を俯瞰する手法は「プールサイド小景」のラストでも使われている。夫が会社の金を使い込んで解雇され、家庭は窮地に立たされる。この事態を悲観していた妻は次第にこの危機を相対化し始める。夫が棍棒で狩りをして帰って来るような太古の家族像を思い浮かべることで現代のサラリーマンの家族のあり方が俯瞰され、さらに子供が口にする、カモシカを追いかけ回すメキシコ・インディアンの話題が唐突に挿し込まれる。平和な異空間の挿入がその場と共鳴することによって、「いま」に穏やかさを与えている。こうした手法も『逸見小学校』ですでにその萌芽が見られるのである。

千野の優しい眼差しは彼の部下たちそれぞれの人生にも注がれる。彼の部下の三分の二は老兵で日々の訓練に四苦八苦し、砲弾を持ち上げるのさえままならない。人的資源の底をさらった末の緊急戦備部隊なのである。千野は彼らを「犠牲者」だと哀れむ。そして召集される前の、郷里での彼らを思う。その場所で顔もよく知られた農夫や理髪師、大工、靴商人であり、家庭ではれっきとした家長であつたはずである。千野は露見すれば自分たちの立場が危うくなることを覚悟で、他の部隊長とともに「墓参休暇」という名目で内密に兵隊たちを一時帰省させたりもする。

また同じ立場の少尉たちとの交流も多く描かれる。先発部隊の五人の少尉と、同じ時期に逸見小学校に来た五人の少尉たちが出て来る。彼ら同士の軋轢を腹を割って話し合つて解決したり、部下たちへの対応を相談し合つたりもする。時にはふざけ合い、時には励まし合う。少尉たちの人間味あふれるエピソードも面白い。佐藤伝兵衛少尉は名前のユニークさに負けないくらい、愛嬌があり、皆から愛されている。大胆不敵であり、宮崎県の青島が次の赴任先なのだが、支那の青島チンタオと偽つて外地部隊用の酒保物品を入手するという、ばれたら軍法会議もののインチキを企てる。高野少尉は弱々しい外見からは想像もつかない熱情を秘め、部下とドッチ・ボールをして暴れるのが大好きである。

死が確実と噂される配置先が変更になった知らせを受け、「おい、生き延びたぞ。俺たちは」と先任下士と手を取り合って喜び、その次の言葉が「ドッチ・ボールをやらう」「やりませう、みんな呼んで来ます」である。八木少尉は人の好い、部下思いの人物である。千野と同じ文学青年でもあり、命の次に大切な物として『小学生全集』の『小公女』⁽¹⁷⁾を肌身離さず持っている。八木は眼をうるませて千野に言う。「おれは、ずいぶん苦しい時や孤独な時、屋根裏部屋のセーラ・クルーのことを考えるんだ。すると、おれの心は不思議に温められる。」「おれにもしも物語を作る才能があつたら、死ぬまでにしたつた一篇だけでいい、この小公女みたいな物語を書いて置きたいと思ふよ。人の心を幸福にし、生きてゆく勇氣と鼓舞を与へてくれる、こんな楽しい物語を」と。同じように過酷な運命の渦中にありながら、一人ひとりそれぞれ違った人生や思いがあり、それぞれの「いま」を生きている。先が見えない状況だからこそ、その生きている肌触りがより切実に読者に迫ってくるのである。

ちなみにここに『小学生全集』の『小公女』が登場するのは興味深い。庄野はのちに「私の古典」と題するエッセイ（『いけ花龍生』、昭和41・2）の中で、『小学生全集』を子供の頃愛読し、「私の古典」と言えるものだと言っている。外国の物語のなかで「空想的、夢幻的な要素のまざったものよりは、どちらかという現実とありそうな筋立てのものが好きだった」と述べた後、その一例として『小公女』を挙げ、こう言っている。

「家なき児」や「小公女」は、大人になつたいまでも、一生のうちにああいう小説を書いたらどんなにいいだろうと思うほどである。（もつとも私は、自分にそういう力がないことも、よく分っている）

八木の言動には小説への庄野自身の思いや志向が投影されているのである。

六、庄野潤三と戦争文学

ところで庄野にとつての戦争文学とは何であろう。前掲のエッセイ「私の戦争文学」の中で庄野は「私は戦場を知

らない。」とことわった上で「十月の葉」「団欒」という二つの短編作品を自分なりの戦争文学の例として挙げてい
る。「戦争中の私の友人や家族に関する思い出で、戦争文学というようなものではない。」としながらも次のように述
べる。

しかし、戦争がなかったとしたら、こういう小さな出来事（その時は決して小さいとは思わず、一喜一憂した
ものだが）も起らなかった。

戦争というのはひと口に悲惨といってしまうのでは足りなくて、平和な時にはちよつと考えられない、いろん
なおかしみや哀感のあることを生み出すのに都合のいい状況をつくる。真剣だから、そうなる。

ここで言う、「真剣」さから生まれる「おかしみや哀感」は、まさにエッセイ「喜劇の作家」¹⁸に明かされている、
庄野がチェーホフから感得した小説の奥義に他ならない。この中で庄野は自らの創作の重要なモチーフとして「おか
しみ」を挙げ、「おかしみ」は「生そのもの」であり、生きている切実さから生まれた「おかしみ」は些細な事柄で
あっても奥行きがあり、また「悲哀のかけ」を帯びていると述べる。そして話は喜劇作家としてのチェーホフに及
び、「人間の不幸を感じる限りなくやさしい心」を持ち、厭世家でありながら、「厭世家のままで終ることを許され」
ず、「人間の不幸を感じる事が痛切になればなるほど、その人の書くものはおかしみをますますよくなる。」と語って
いる。

戦争という不幸の中で生きる人々の姿をやさしい心でよく見、感じるからこそ、より切実なおかしみや哀感が感じ
取れるのである。それは戦争特有のものというよりは「いま」の肌触りを描くという庄野の一貫した文学の課題でも
あるが、戦争という非日常のなかにも静かな日常があったこと、しかもその日常には平和な時にはない切実さや懐か
しさがあったことを庄野の戦争文学は伝えている。ここに他の戦争文学そして彼自身の夫婦小説とは一線を画す特質
がある。

また庄野の戦争文学を考える時、「歴史眼」という要素も見逃せない。庄野は文学の師である詩人・伊東静雄の勳

めで九州帝国大学で東洋史を学ぶ¹⁹。伊東は庄野に「史感のない文学は駄目」「これからの新しい文学は、自分の心理や何やらをほじくったりするものでなく、また身辺小説でもなく、ひとつの大きな歴史に人が出交すそのさまを、くどくどしたことは書かずにそのまま述べてゆく（源平盛衰記、平家物語などのように）、そんなのがいい」「理屈や心理のかげ、自己探求などちつともない、壮大な筆致が必要だ」と教えている²⁰。「史感」とは「史観」ではなく、歴史の感覚のことである。庄野は「夫婦小説」においても「厳正な歴史家の眼」が必要であると述べ、歴史から家庭を俯瞰する視点の重要性を意識している。庄野の戦争文学はまさに「ひとつの大きな歴史に人が出交す」姿をゆつたりとした筆致で描いている。

『逸見小学校』とほぼ同時期に書かれた「十月の葉」は一足先に入隊した武波との交友録である。「私」への書簡の中で武波は、軍隊の当番に奔走する自らの姿をユーモアたっぷりの漢詩に詠み、「風を受くる十月の葉」と戯画化する。運命に翻弄され、屈折しながらも「美感の強靱さ」を保ち、しなやかに生きる武波の姿が描かれる。この小説の最も印象深い場面が酒保のビールを武波の兵舎から内密に貰い受ける場面である。手紙での事前の連絡は上官の検閲があるため、漢詩の中に「美耶^{ビィヤ}」と表現したり、大伴旅人の讃酒歌に因んで『——事を思はずは一つきの』に類似のもの（独逸的？）と洒落たりと、戦時下ならではの機知に富んだやり取りである。当日「私」は兵隊の目を盗み、偶然そこで遊ぶ子供たちに羊羹と交換条件で協力を仰ぎ、兵舎の外に隠された瓶ビールを見事獲得する。下宿に戻り、手紙で暗号を用いてビールを受け取った旨を報告すると、返信には「祝美耶奉遷」という題の漢詩が書いてある。太平洋戦争という大きな時代状況、そこから派生した「検閲」や物資の不足といった過酷な状況が図らずも、このような切なくも愉快な小さな出来事を作り出し、そこから歴史が立ち上がってくる。

「団欒」（『文芸』、昭和29・6）は、戦後「私」が母の日を記念した公開座談会に出席し、母にとって「戦争中の最も印象の深い出来事で、いつも一つ話のように繰返していた話」をするという内容の短編である。その話とはこうである。海軍少尉に任官した「私」は佐世保から輸送船に乗り、フィリピンへ赴任することが決まる。当時輸送船は台

湾へ着くまでに殆どアメリカ軍に沈められる状況であった。館山砲術学校にいた「私」は佐世保へ向かう途中、大阪の実家に寄って宿泊する許可を得た。そんな折、母と妹が「私」に会うために大阪から館山に向かっているという電報を受ける。それから行き違い行き違いでやっこのことで東京の旅館で会えるのだが、「私」のためにおはぎやら羊羹やらビールやら大荷物を抱えた母たちは道中でもいろいろとあり、大変だったことが分かる。このエピソードも一見何でもない戦時下の一コマに過ぎないが、家族の切実な思いが歴史から俯瞰され、歴史が肌触りのように伝わってくる。通信や交通の不便さが生み出した過去の話であるが、現代社会に問いかけることも多い。

『近代戦争文学事典』⁽²²⁾にも載る「相客」(『群像』、昭和32・10)は、戦争中ジャワでオランダ人捕虜収容所の副官をしていた兄が突然、戦犯容疑を掛けられ、列車で大阪から巣鴨まで護送されるのに庄野が同行した体験に基づいた短編である。たまたま同乗した、もう一人の容疑者の身の上話を聞き、その運命に同情し、その人生や家族に思いを馳せる。「前途」に紹介される庄野と伊東との対話が思い出される。戦時中、列車の中で若い母親が疲れてうとうとして赤ん坊を落としそうになるのに友人が動くわした時の話を庄野がすると「小説というのは、いまの話のようなものです。空想の所産でもなく、また理念をあらわしたものでなく、手のひらで自分からふれさすった人生の断片をずうつと書き綴って行くものですね」と伊東が言う。庄野の戦争文学は戦争に関わる人間一人ひとりの物語を自らの感じ取った体験の中からその時感じた手触りのままに掬い上げることに他ならない。

七、『逸見小学校』の姉妹編「青葉の笛」

さて『逸見小学校』の姉妹編とも呼べる作品がある。「青葉の笛」である。これについても考察し、『逸見小学校』の特質を掘り下げておきたい。「青葉の笛」は福岡を中心とする文芸誌『午前』の昭和二二年五月六月合併号に掲載された短編小説である。生前発表した小説の中で、庄野の軍隊体験を題材にした唯一の作品であり、千野少尉が主人

公である。庄野自身が作った彼の年譜（『庄野潤三全集 第十巻』所収）にもその作品名が記載されているが、「私の戦争文学」の中で触れていないのは、庄野自身も習作期と意識する頃の作品だからであろうか。

舞台は『逸見小学校』の横須賀と同様、要所となる軍港の佐世保である。千野少尉は、昭和二〇年一月、フィリピン（比島）に赴き、南方作戦に参加すべく佐世保に集結したのだが、アメリカ軍が比島に進攻を開始したため、比島行きは中止、配置変更となり、特殊潜航艇に搭乗するための訓練を受けるべく、大竹潜水学校行きが告げられるまでの話である。『逸見小学校』と同様、庄野自身の体験に基づいており、年譜とも一致する。『逸見小学校』は千野少尉が大竹潜水学校での身体検査で不合格となり、館山砲術学校に戻り、千野隊を編成し、準備を整えるために横須賀の逸見小学校にやってきたという設定になっているので、時間の流れからしても「青葉の笛」は『逸見小学校』へとつながっている。

内容的にも類似した箇所が多い。文学を愛好し、正義感があり、情に厚い千野の性情。戦友との交流。館山砲術学校で一緒だった西岡と「シラノ・ド・ベルジュラック」について熱く語り合う箇所は、『逸見小学校』で八木と「小公女」について語る場面を彷彿とさせる。

しかし『逸見小学校』と比べると千野少尉の置かれた状況はかなり違う。日本軍全体の絶望的状況は変わらないものの、『逸見小学校』がいわば「海軍生活の中で初めてのある幸福な期間」であるのに対して、「青葉の笛」の千野少尉は、激戦の地である比島行きは免れたのも束の間、秘密兵器「人間機雷」に搭乗するという決死の特殊部隊に配属されるといふ状況である。この兵器は、一人乗りの潜水艇を自爆させることによって敵艦を沈めるといふもので、母艦から切り離されたら最後、帰還することもできない。比島行きだった要員のうち、三分の二が特殊部隊、残りが普通の内地勤務に転属されるといふ情報が流れる中、死刑宣告を待つような日々を送る。同時に千野は「人間を侮辱」し、神をも畏れぬ、この兵器に「烈しい憤り」を感じる。また千野の憤りは、上官の言動や海軍の体質の陰険さにも向けられる。「青葉の笛」は、生死の間を彷徨う苛酷な状況のもと、戦争の非人間性を告発するというメッセージ性

を直接的に色濃く出している。

「青葉の笛」のラストは、特殊部隊への配属が告げられ、西岡と飲み明かして別れる場面で終わるのだが、その時の千野の言葉が印象的である。千野は大通りを歩きながら考えたことを西岡に語る。

ひとり歩いてゐるのが淋しく思はれたんだ。道を行く人がみなたまらなく懐しいんだ。あゝみんな、あゝして歩いてゐる、と妙な感動をしてゐる。そして、おれがゐらなくなつてしまつて後も、今、自分が眼の前に見てゐるやうにあゝして同じやうにみんな歩いてゐるのだらうと思ふんだな。すると矢鱈に切なく感傷的になつて来る。

また故郷の妹と同じ、女学生の挺身隊たちが健気に工場に通う姿を見て「生きてゐるといふことが、どんなに美しい、尊いことに見えるかが、はつきり分つたんだ。」と言う。そして上官や海軍のあり方への恨みはもうないと続ける。

さういふものを越えた、我々の眼には見えないものが俺達を動かしてゐるんだ。どうにもならないものがあるんだ。その前には人間が何とか細く可憐に見えるんだらう。何とあはれなんだらう。

この場面は先述した『逸見小学校』の桜の場面、「わが文学の課題」の南京はぜの場面、『三人姉妹』のラストシーンの世界観に通じている。「青葉の笛」が書かれたのは庄野のチェーホフ研究より以前であるので、『三人姉妹』は以前から既に庄野の念頭に印象づけられていたのだらう。⁽²³⁾しかしチェーホフ研究を経て、これらの場面だけを比較しても「青葉の笛」から『逸見小学校』、「わが文学の課題」へとその世界は確実に深まっていることが分かる。作品全体を見回しても、もちろん「青葉の笛」と『逸見小学校』の状況設定の違いもあるのだが、やはりその間には深化が覗える。『逸見小学校』は千野少尉を取り巻く、個性あふれる人物を多く登場させ、その心情を多面的に描き、おかしみや哀感、絶望や希望など様々なものが捨象されず並存する豊穡な世界が立ち上がっている。

八、『逸見小学校』の改稿

『逸見小学校』がなぜ庄野の生前に未発表のままだったのか定かではない。前掲の鷺只雄の解題によれば、原稿を発見した庄野夫人は実在したモデルに迷惑がかかることを恐れたのではないかと語っていたようである。また鷺は「戦後派作家たちの、派手で目立つ時流」とは余りにかけ離れた「地味で目立たないテーマ」のため、世に出すことを敬遠したのではないかと推論している。

遺された生原稿を確認すると、発表を遠慮した割には何度かに亘る夥しい推敲の跡が残り、『逸見小学校』への強い思い入れが覗える。最も注目される点は、脱稿から恐らくある程度の時間を経て、大幅な改稿が行われていることである。原稿は最初青インク（途中黒インクの部分もある）のペンで書かれ、その都度いくつもの細かな削除・加筆・言葉の修正がなされている。その後で濃い黒鉛筆⁽²⁴⁾によって大幅な改稿がされている。この鉛筆による改稿は、ほとんどが削除の跡であり、全体に亘って何十箇所にも及び、その分量は四百字詰め原稿用紙全百八十枚の原稿中、合計するとおよそ十三枚分に及ぶ。一気に削除した部分も多く、多いところでは一枚半に亘って思い切って削っている。改稿の基本的な姿勢は、説明的すぎる部分や冗長な部分を刈り込み、語り手が意識的にまた無意識に顔を出し、物知り顔に小説世界を俯瞰し、差配する「神の視点」めいた表現をカットすることと考えられる。例として削除された部分を二箇所だけ挙げておく。

私はこゝで千野少尉（この物語の主人公）のゆつくりとした歩調を追ふ前に、是非とも前夜以来の彼の行動について語る必要を感じてゐる。

この千野の最初の印象は、その後が続く約一と月のこゝでの生活から振りかへつて、決して誤つてはゐなかつたことが分つた。（中略）こゝに横須賀市逸見小学校にたまたま置かれた千野たちに取つては却つてこの事が稀

にみる調和に満ちた世界を作り上げる結果となつたのではないだろうか。(中略)話を先へ進めよう。

この改稿の方法は昭和二八年に短編集『愛撫』を刊行する際に行われた「舞踏」「スラヴの子守唄」などに見られる大幅な改稿と同様の方向性が覗える。²⁵⁾「夫婦小説」で得た成果を改稿に反映させたものと思われる。「十月の葉」も昭和二九年に同様の大幅な改稿をしている。従つて『逸見小学校』も昭和二四年脱稿の後、時を経て昭和二八年以降、ある時期に大幅な改稿をしたと考えて無理はないだろう。²⁶⁾

庄野潤三は昭和二十年代、その小説のあり方を探求していった。その中でチェーホフ研究は大きな意味を持つている。もちろん他の古今東西の作家、師の伊東静雄の影響も包含しつつ、チェーホフの世界観、小説手法を自分なりに取り入れていった。『逸見小学校』はその意味では「夫婦小説」と同根であり、また改稿という点では「夫婦小説」で磨き上げていった独自の小説世界の成果も踏まえていると言えよう。戦争を題材にしながら、その中に生きる人々の「いま」を生き生きと描きあげた『逸見小学校』はまさに「庄野潤三」の戦争文学である。

注

- (1) 「昭和二十年代における庄野潤三の文学修業——チェーホフ受容を軸に」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第17号(日本文化専攻編第7号)、平成28・3)および「庄野潤三」ブルサイド小景」論——チェーホフの笑劇「コーラス・ガール」との比較を軸に」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第18号(日本文化専攻編第8号)、平成29・3)
- (2) チェーホフ四大戯曲の一つ。一九〇〇年秋頃に完成、翌年一月、モスクワ芸術座にて初演。
- (3) 「江原みちこ」は最終章の十章では「江原みち」となっている。
- (4) 鷺只雄「単行本『逸見小学校』巻末の解題」(新潮社、平成23・7)
- (5) 『逸見小学校』の引用は単行本『逸見小学校』(新潮社、平成23・7)より。
- (6) 庄野潤三「愛撫」(『新文学』、昭和24・3月4月合併号)
- (7) 『文学雑誌』(昭和22・1)に「チェルニのうた」として発表された庄野潤三が作った詩の一節が『逸見小学校』に引用され

ている。

- (8) 庄野潤三「私の戦争文学」(『読売新聞』、昭和39・8・25)
- (9) 「十月の葉」の引用は『文学雑誌』(昭和24年7月8月合併号)より。引用した箇所は、「ニューエイジ」(毎日新聞社、昭和29・1)掲載時に、改稿してカットされた。おそらく武波に関する話に集約するためと思われる。
- (10) 『群像』(昭和37年8月号)掲載のエッセイ「文学を志す人々へ——ある夏の読書日記」の中で、その際に記した「チェーホフ・ノート」に「七月九日。夏休みの計画について。チェーホフ研究。桜の園、三人姉妹、叔父ワーニヤ、かもめを読み返す。」と書いてあると庄野は述べている。
- (11) 『三人姉妹』の引用は庄野が当時実際に読んだ中村白葉訳『チェーホフ著作集第16巻「桜の園」』(三学書房、昭和18・5)より。漢字は旧字から新字に改めた。
- (12) 宮沢章夫『チェーホフの戦争』(青土社、平成17・12)
- (13) 一九〇〇年10月16日の日付の手紙。池田健太郎訳『チェーホフ全集第16巻』(中央公論社、昭和36・6)より抜粋。
- (14) 池田健太郎『チェーホフの仕事部屋』(新潮社、昭和55・12)
- (15) (14)に同じ。
- (16) 「谷間」の引用は池田健太郎訳『チェーホフ全集第11巻』(中央公論社、昭和35・3)より。
- (17) フランシス・ホジソン・バーネット『小公女』(一九〇五)。菊池寛訳の『小学生全集第52巻「小公女」』(興文社、昭和2)。
- (18) 庄野潤三「喜劇の作家」(劇団「雲」『桜の園』公演プログラム、昭和43・5)。チェーホフを念頭に喜劇作家のあり方を分析し、人間の「おかしみ」を追求する、自らの小説家としての創作姿勢についても言及している。
- (19) この事情は庄野潤三「文学交友録」三章・四章(『新潮』、平成6・3月号4月号)に詳しい。
- (20) 庄野の日記をもとにした日記体の小説「前途」(『群像』、昭和43・8)による。「前途」の引用は『庄野潤三全集第七巻』(講談社、昭和49・1)より。
- (21) 庄野潤三「愛情に満ちた歴史眼を——作家の理想」(『同志社学生新聞』、昭和25・6・15)
- (22) 矢野貫一『近代戦争文学事典第十三輯』(和泉書院、平成26・7)
- (23) 庄野が『三人姉妹』をいつ頃から読んでいたか定かではないが、「前途」の昭和十八年四月十八日の項に「桜の園」と「三

人姉妹」を読み直したと友人に語る記述があり、何度も読み返したことが覗える。「青葉の笛」の発表は昭和三二年六月であり、この時『三人姉妹』が念頭にあったのならば、チェーホフ研究を手掛けるきっかけの一つになったとも考えられる。

(24) 庄野潤三はステッドラーの3Bの鉛筆を愛用していた。

(25) 「舞踏」「スラヴの子守唄」の改稿については(一)の拙論で詳しく考察した。

(26) 庄野が晩年に、時々『逸見小学校』の原稿に手を入れるのを庄野夫人は見ていたようである。そのことを今回ご長女からお聞きすることができた。

“Hemi Shogakko” in Shono Junzo’s war literatures in Comparison with Chekhov’s “Three Sisters”

Motoki Murate

“Hemi Shogakko (逸見小学校)” is a Shono Junzo’s war literature that was discovered and published in 2011 after his death in 2009. It is thought that this novel was written in the 24th year of Showa (1949) and published 60 years later. This novel is the first full-scale war literature for Shono and is based on his experiences in the navy. I’m going to talk about this novel mainly from Chekhov’s viewpoint.

In the 20s of Showa Era Shono Junzo produced several novels that are called “Fufu Shosetu (夫婦小説)”, which portray a husband and wife in their daily life. He was discovering his own style of writing. This exploration was greatly influenced by Chekhov’s techniques and thoughts. “Hemi Shogakko” belongs to a different category from “Fufu Shosetu”, but it is under the same exploration. At first, I will show that this novel has a close relationship to the last scene of Chekhov’s “Three Sisters”, and I will point out the charm of his work.

“Three Sisters” is a family drama in the background of war. The family lives in a military city and their dead father was a military general, so soldiers often come. The violence of son’s wife that newly comes to this family has a very important role. This content is connected to the idea of “Hemi Shogakko”. I think “Hemi Shogakko” receives the different influence from “Fufu Shosetu”.

I will consider Shono’s other works that deal with the war, and I will also explore what war literature means for Shono.